

DISCUSSION PAPER SERIES

Centre for New European Research

21st Century COE Programme, Hitotsubashi University

024

ヨーロッパにおける仏教の諸相

－チベット仏教への関心を事例として－

久保田滋子

March 2007



<http://cner.law.hit-u.ac.jp>

Copyright Notice

Digital copies of this work may be made and distributed provided no charge is made and no alteration is made to the content. Reproduction in any other format with the exception of a single copy for private study requires the written permission of the author.

All enquiries to cs00350@srv.cc.hit-u.ac.jp

ヨーロッパにおける仏教の諸相 ーチベット仏教への関心を事例としてー

一橋大学大学院社会学研究科後期博士課程

久保田滋子¹

1. はじめに
2. 歴史的概観
3. 60年代以降の状況
 - 3-1 チベット仏教の流入
 - 3-2 タシ・ラプテン (Thashi Rabten) の設立と活動
 - 3-3 仏教の組織化と宗教化
4. おわりに ー在外チベット人と仏教センターのつながりー

1. はじめに

1960年代以降、欧米では仏教に関心をもつ人々が漸増しはじめた。特に80年代後半からの約20年間に、ドイツ、フランス、スイス、オーストリア、イギリス、アメリカ、オーストラリアなどの国々では、主要都市に様々な宗派の仏教センターや仏教書の出版社が設立され、数万人を集めるイベントも開催されるようになった。チベット仏教ではダライ・ラマが法要を行うカーラチャクラと呼ばれる催しが世界各地で行われているが、1981年以降、欧米ではアメリカで4回、スイス、スペイン、オーストラリア、オーストリア、カナダで開催されており、2007年にはドイツでの開催が予定されている。カーラチャクラは地元自治体や大学、文化団体などが協賛する規模の大きいイベントで、毎回平均約2万人の参加者を集めているが、このことは仏教へのいわゆる「改宗者」²の増加のみでなく、関心を持つ人々の裾野の広がりを示している。今、欧米で仏教徒を名乗ることは、かつてのような異端視も薄れ、ライフスタイルの一つとして社会的に認知さ

¹ Shigeko Kubota E-mail: snowy@hkg.odn.ne.jp

² ヨーロッパには2種類の仏教徒 (Buddhist) がいる。ヨーロッパ内に定住するタイやベトナム、カンボジア、チベットなどの仏教圏の人々と仏教に改宗したヨーロッパ人である。どちらも同じ仏教徒ではあるが、後述するように異なるコミュニティを持つため、ヨーロッパ人仏教徒は Convert と表現されることが多い。

れるようになってきている。

サイードは『オリエンタリズム』において、東洋学が単なる学問の一分野であるのみでなく、東洋の研究を通じた、「西洋」の対概念としての「東洋」の構築であったことを指摘した。サイードは中でもヨーロッパのイスラムへの偏向した視線を問題視しており、たとえば『イスラム報道』においては、唯一悪魔的信仰と恐れられたのはイスラム教であると記している。オリエンタリズムが主にイスラムの問題として論じられるのは、中東が地理的にヨーロッパに隣接していることと同時に、十字軍以来のさまざまな抗争の歴史に加え、ヘブライズムとヘレニズムという文化的源流をともにする「近い」関係にあるからであろう。それに比べ、仏教文化を持つ地域とヨーロッパの間には、目立った抗争の歴史もなく、文化的な軋轢も生じなかった。しかしそれゆえ、想像の中でより強固な「西洋」の対概念が形成されたともいえよう。ロジェ＝ポール・ドロワによると仏教もやはり悪魔的信仰として恐れられていた時期があったという。19世紀のはじめ、ブッダ信仰と呼ばれていたものが、ブッディズム（「仏教」）と名づけられてほどなく、仏教は東洋学者やヘーゲルなどその哲学に関心を抱いた人々によって「虚無信仰」、つまり魂の存在を前提としたキリスト教とは対立するもの、魂の消滅を信じる宗教という解釈が定着していった。仏教徒に関心を寄せていたショーペンハウアーは、その虚無自体に意味を見出し、またペシミズムに傾倒する人々からもその思想は賞賛されるようになっていくが、否定的であれ肯定的であれ、仏教が従来の「西洋」の思考の枠ではとらえがたいものを信仰しているという怖れは、ヨーロッパの知識階級の中に根強く広がっていた。この時代は、東洋学の専門家によって、経典解釈などの実証研究が積み重なっていたが、これにより誤解や恐怖心が解かれたわけではない。むしろその客観的な仕事が幻想を刺激してひとびとを夢想へといざない、妄想をかきたてたのである。

では、こうした仏教イメージから、「仏教徒」であることが社会的に認知されるよう

になるまでの間には何があったのだろうか。西洋のオリエンタリズムによって作り上げられたイメージが崩れて、新しい仏教観が生じるまでにはどのような契機があり、どのようなプロセスをたどったのだろうか。仏教が再び西洋で注目を集めるのは 1960 年代後半からである。60 年代はアジア、アフリカ諸国から欧米への人の流れが急激に増えた時期でもある。アジアの仏教圏からは主に難民として、またトルコなどのイスラム圏からは労働力移民としてヨーロッパに多くの人に移住した。しかし移住後、ホスト国における両者の立場は反対の状況を呈した。数の上で圧倒的にまさるとはいえ、ムスリムは移住先で母国にいるとき以上にイスラム的实践を強め、集団としての絆を固めたのに対し、仏教徒にはそのような動きはあまり見られなかった。チベット仏教の流入は西洋における仏教の裾野を広げたが、それは難民として国外に出た僧たちが、いわゆる仏教を原理主義的な方向へ向かわせたのではなく、むしろヨーロッパの価値観に積極的に合わせていこうとする側面を持っていたからでもあった。チベット難民のコミュニティとヨーロッパの仏教センターも、一見何も接点がないように見えながら、仏教を介在にしてその周縁部でつながっている。本論ではヨーロッパにおける仏教の受容について、歴史的な側面と現代の状況を概観し、仏教がなぜ急速に広がっていったのか、仏教圏からの移民はこの状況をどのように受け入れ、仏教を通してヨーロッパとどのような関係をもってきたのかという点を中心に、主にチベット仏教とチベット人を事例に考えてみたい

2. 歴史的概観

「仏教」という名称が使われ出したのは 19 世紀初頭で、ドロワによれば 19 世紀初頭以前には、ブッダという名前と結びつく宗教的体系は知られておらず、東洋学において、日本の釈迦、中国の仏、インドのブッダが同一の人物であることは知られてはいた

が、それはせいぜい東アジアの偶像崇拜の父という程度の認識であったという。すでに13世紀にはインドを離れ、チベットから中国、日本へ、またタイ、ビルマへと伝播した仏教は、インド学の範疇ではなかったために、ヨーロッパの知的枠組みから外れた存在だったといえよう。1917年にフランスで発行された冊子³で「仏教」(buddhism)という単語が使われたが、これはフランス語で「仏教」という言葉を使った最初の著作のひとつであった。いったん名づけられ、知的枠組みに組み入れられると、さまざまな実証的研究が開始される。はじめての科学的な仏教研究と評価されたのは、1844年に出版されたフランスの東洋学者ウジェーヌ・ビュルヌフによる、上座部仏教のパーリ語経典の解説書⁴である。これによって、中国、モンゴル、チベット、ネパールの仏教研究がその源流であるインドに結び付けられ、ヨーロッパにおける仏教概念のプロトタイプを形作った⁵。ドイツにおいて仏教に深く影響を受けたのはショーペンハウアーだった。ライプニッツ以来のオプティミズムに対し、ペシミズムを提唱したショーペンハウアーは、西洋の論理的思考から、新しく形成された東洋の知へ関心を移していった。現代において、仏教が西洋近代批判と結びつくのは、このようなペシミズムを根本においた近代合理主義の進歩思想批判と仏教的思想の結びつきに端を発するとも考えられる。

学問としての仏教への関心と同時に、19世紀後半にはチベットやネパールに由来する密教的な志向をもつ神智学がヨーロッパ、アメリカで関心をもたれるようになった。この時代はポルターガイストなどの心霊現象が世間を騒がせ、降霊などを行う心霊主義が一種のブームにもなっていた。アメリカで1875年に神智学協会が設立され、その創始者であるオルコットは『仏教問答集』⁶を著したが、それは二十ヶ国語にも翻訳され、版を重ね、広く一般の読者を獲得して、まもなくヨーロッパにもその影響が及んだ。

³ ミシェル＝ジャン＝フランソワ・オズレー 1817『東アジアの宗教の開祖ビュッデウあるいはブッデウに関する研究』

⁴ Burnouf, Eugène (1801-52) 1844 *L'introduction à l'histoire du bouddhisme indien* 『インド仏教史入門』

⁵ Baumann, Martin 2002 p.86 (Batchelor Stephen *Awakening of the West The Encounter of Buddhism and western Culture*)

⁶ Olcott, Henry Steel 1881 *The Buddhist Catechism*

1884年にはドイツで、1894年にはオーストリアでも神智学協会が設立された。ドイツではライプツィヒだけで、第一次世界大戦が始まるまでの間に7つのグループが設立され、また時期を同じくして1903年にはヨーロッパではじめての仏教協会（*der Buddhistischen Gesellschaft*）が創立された。仏教関係の出版物の多くは財源を頼って神智学の出版社から出されていたが、やがて仏教は神智学から独立して独自の発展を遂げるようになった⁷。当時セイロンではオルコットが仏教に改宗し、「白い仏教徒」としてキリスト教に対抗し仏教復興運動で中心的役割を担っていたが、同時期にヨーロッパでは神智学を通して仏教が一般に膾炙していったのである。セイロンでの指導的立場にあったアナガーリカ・ダルマパーラ⁸は1893年にシカゴ世界宗教者会議で仏教復興の必要性を唱えてから1933年に死亡するまで、イギリス4回、またドイツ、フランス、イタリアを訪問し、世界的なネットワークをもつ新しい仏教協会⁹を設立した。

第二次世界大戦終結までの間、ヨーロッパでは仏教をめぐる動きに目立った変化はなかった。ドイツでは後の仏教センターにつながるような信者のコミュニティが形成され、地道に経典の翻訳作業や一般の人々へのレクチャーなどが行われていた。その聴衆は500人を集め、時には1000人に及ぶこともあった¹⁰。戦争中、仏教はナチス・ドイツによって反戦的であるとみなされ、活動は制限されたが途切れることはなかった。ドイツのほかには、イギリスとフランスに小規模な仏教グループが存在したが、戦争中も活動を続けたところはほとんどなかった。戦禍の及ばなかったスイスでは1942年にチューリヒに仏教グループが結成され、1948年から仏教徒向けの雑誌¹¹が発刊されてきた¹²。

第二次世界大戦後の1950年代から、日本の禅が鈴木大拙の著書とともにヨーロッパに紹介され、戦争で疲弊した人々の間に少しずつ広がりを見せていった。これは後の

⁷ Mürmel, Heinz 2001 p.129-134

⁸ Anagarika Dharmapala 1864-1933

⁹ The Maha Bodhi Society ドイツでは1911年、イギリスでは1926年に設立

¹⁰ Baumann 2001 p.14

¹¹ *Die Einsicht*

¹² “Geschichte und Gegenwart des Buddhismus in der Schweiz” in Schweizerische Buddhistische Union website

70年代、80年代のメディテーション・ブームにつながるものであった。日本からは他にも創価学会がドイツ、フランス、イギリスを中心に、ヨーロッパの多くの国に進出した。戦前のヨーロッパの仏教が、経典の解釈など哲学、思想の摂取を中心としてきたのに対し、戦後はライフスタイルに溶け込むような、実践を中心とした形に変わっていった。これによって仏教は「宗教」という核の外側に広い裾野を持つことになった。

ヨーロッパにおける仏教はアジアとの直接の交渉によってもたらされたものでなく、東洋学者の研究と表象、それを解釈した哲学者たちのイメージによって最初の土台が形成された。最初の名づけから約100年の間に、仏教は「宗教」としてヨーロッパ世界に認知され、単に学者の知的関心を引くだけでなく、一般にも浸透していった。「西洋は仏教をひとつのものではなく、二つのものとして発見してきた。それは哲学的な仏教と大衆の仏教である。これはまさに今日まで続いた区別である¹³」。1960年代、70年代を中心に、アジアからの難民、移民がヨーロッパに定住するようになった。どちらかというとなら哲学的な仏教が中心であったそれまでの時代とは打って変わって、この時を境に大衆の仏教が勢いを増していったのである。

3. 60年代以降の状況

2005年7月初旬、ドイツの雑誌『シュピーゲル』が世論調査機関TNSに依頼して、ドイツ人の信仰に関する調査を行った¹⁴。ドイツ出身のローマ法王ベネディクト16世が就任後初めてドイツを訪問する1ヶ月前のことで、ドイツでは宗教に関する話題がマスコミに多く登場していた時期でもある。「神を信じますか」という問いに「はい」と回答したのは、60歳以上で77%であったのに対し、45歳から59歳までが61%、30歳から44歳までが64%、18歳から29歳までが56%であった。最も若い世代とその

¹³ ヴァレンタイン 2002 p.167-168

¹⁴ Spiegel Nr.33 2005

上の世代との間に多少差があるものの、明らかに差があるのは、日本でいえば団塊の世代とそれ以上の世代との間である。60年代後半から70年代にかけては、ヨーロッパでもアメリカのカウンターカルチャーほどではないが、ディープ・エコロジー思想などが広がりはじめ、既成の価値観に変化が生じるターニングポイントでもあった。シュヴァイトレンカによれば、ドイツ語圏では、ヘルマン・ヘッセの小説（『シッタルダ』など）がこの時代の感性に影響を及ぼしたということだが¹⁵、このような著作を通して、この時代の若い人たちが、戦前のオリエンタリズムとはまた違う観点から、東洋に関心を持ち始めたということも言えるであろう。

チューリヒの中心部で専門書を扱う大規模書店 **Orell Fuessli** の宗教書コーナーでは、仏教関係の書棚がキリスト教の約5倍もあり、またドイツのフライブルク駅構内にあるベストセラーを主に扱うような小規模書店でも、ローマ法王の写真を表紙にした本よりも、ダライ・ラマを表紙にした本の方が多くの場所を占めていた¹⁶。『シュピーゲル』の世論調査からは、この時代に青年期を過ごした人々が、キリスト教以外の宗教にも接近しやすい様子が見て取れるが、現代はそのような人々が社会の中心になり、文化的嗜好を特徴づけていると言えるであろう。また、60年代は人、もの、情報の移動が地球規模で起こるようになり、難民の受け入れも、隣接する地域だけの問題ではなくなり、遠くはなれたアジアからもヨーロッパに移住を求めるケースが増えてきた。現代のヨーロッパに仏教が広がりつつある背景には、時代の風潮とともに、このようにして移動してきた人々との直接の関係が大きな要因として存在する。

3-1 チベット仏教の流入

1959年、ダライ・ラマが中国からインドへ亡命し、それに伴って約10万人のチベッ

¹⁵ Schweidlenka 2001 p.199-120

¹⁶ 2005年12月の調査

ト人がインド、ネパール、ブータンに難民となって流入したと言われている。そのうち約8割の人々は亡命政府のあるインド、あるいはネパールに留まったが、その他は世界約30カ国に離散定住した。その中には欧米各国の大学にある東洋学、チベット学関係の研究部門に招聘¹⁷されたり、また新しい活動の地を求めて欧米に仏教センター¹⁸を作った僧侶も多かった。60年代後半にはカウンターカルチャーの盛んなアメリカへ、またヨーロッパでも70年代を中心にイギリス、フランス、ドイツ、スイスに、難民僧侶による仏教センターが開設された。チベット難民は他の難民に比べ、欧米からの援助が多く集まり、インド、ネパールにはチベットの主だった寺院が再建されたが、そこに所属する地位の高い転生僧侶が、欧米への説法ツアーを頻繁に行うようになった。ダライ・ラマも毎年世界各国で仏教に関するティーチングを行っている¹⁹。こうした影響もあって、70年代と80年代の20年間にドイツでは仏教センターの数が40から500に、イギリスでは74から400に増え²⁰、センターに通わないまでも、テレビや新聞、雑誌を通して関心を抱く人々の層も厚くなっていった。

中でも仏教徒全体に占めるチベット仏教徒の割合は90年代に入って上昇し、1998年から2000年までの各国の統計を集めたバウマンの資料によれば、イギリスでは36.9%、フランス36.8%、ドイツ42.2%、スイス48%となっている。60年代に難民が発生し、70年代に僧侶が仏教センターの基盤を作るまで、ほとんど「信者」がいなかったことを考えると、この短期間での成長は、近代化批判など西欧の時代的風潮とチベ

¹⁷ 日本でも東大にある東洋文庫が1961年に最初の3名を招聘して以来、毎年研究員としてインドより難民僧侶や中国の支配を受ける前のチベットで高等教育を受けた人を招いている。1985年に招聘されたチャクター・ソナム・チュンペー氏の略歴は『チベット特別調査研究年次報告・昭和60年度』東京：東洋文庫に詳しい。氏は中国で約10年間、政治犯として投獄されたのち、1981年に難民となった親族をインドに訪ね、そのまま亡命した。

¹⁸ そのような仏教センターのひとつ、大乘仏教保存財団 (Foundation for the Preservation of the Mahayana Tradition) は1975年ラマ・イエシェ(Lama Thupten Yeshe, 1935-85)によってアメリカで設立され、現在ではインド、シンガポール、台湾、オーストラリア、ニュージーランド、ブラジル、フランス、スペイン、イタリアに支部を、世界26カ国にメディテーションセンターを、6カ国に僧院を持っている。

¹⁹ 1991年に行われたダライ・ラマの海外でのティーチングは、3月5日ブリュッセル、3月8日ロンドン、8月12-15日ニューヨーク、8月20-27日ブルーミントン (USA)、10月12-14日ロスアンジェルス、10月20-25日ミラノ、12月4-5日ダーバン (南アフリカ) であった。

²⁰ Baumann 2002 p.93

ット仏教の提供するさまざまなアイテム — 仏教の教義ばかりでなく、映像表象として背景を飾るチベットの風景などの周辺の要素 — が偶然合致したというよりは、むしろチベット仏教の側が西欧の期待に積極的に歩調を合わせていった結果であろう。キリスト教のヨーロッパ外部への布教が「力の布教」であったとすれば、現代のチベット仏教の欧米への布教は「受動の布教」である。仏教に布教という概念はないが、受け入れる側の人々に柔軟に対応していくためには、布教のような対面的な関係が必須だったのである。仏教圏からは他にベトナム難民、カンボジア難民もヨーロッパ、アメリカに移住したが、彼らの宗教的活動はチベット仏教に比べればコミュニティ内部に限定され、欧米の人々が関心を持つ仏教とは一線が引かれているケースが多い。しかし、その仏教もヨーロッパという新しい環境で別の変化が起こっている²¹。チベット仏教ではどのような僧侶がどのような契機でヨーロッパとかかわりを持ったのか、以下にスイスとオーストリアに基盤を持つ仏教センターについて具体例をあげてみたい。

3-2 タシ・ラプテン (Thashi Rabten) の設立と活動

僧院も兼ねる大規模な仏教センター、タシ・ラプテンは、1982年にスイス国境に近いオーストリアのフェルトキルヒ (Feldkirch) 郊外に建つレッツェホフ (Letzehof) という建物を買って開設された。ラプテンという名前がつく仏教センターは、タシ・ラプテンの他にスイス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、チェコ、フランスの6ヶ所²²にあり、どこもゲシェ・ラプテン (Gesche Rabten 1921-86) の開設であるため、その名を掲げている。彼は他にも、ドイツでは最も規模の大きいチベット仏教センター (ハンブルク)、ミラノの仏教センターの開設にもかかわった。ゲシェ・ラプテンは 1921

²¹ ドイツにおけるベトナム人コミュニティの仏教の変化に関しては、Baumann 2000 *Migration, Religion, Integration: Buddhistische Vietnamesen und hinduistische Tamilen in Deutschland Marburg: diagonal verl.*

²² Rabten Choeling (スイス、1977年)、Pünzok Rabten (ドイツ、1984年)、Deleg Rapten (オーストリア、1995年)、Rabten Tashi Ling (ハンガリー、1995年)、Rabten Chödaling (チェコ)、Rabten Tchangtchoub Ling (フランス 2002年) カッコ内それぞれ開設年。

年チベットで生まれ幼少時に僧籍に入り、18歳からチベットの中心地ラサにある最大規模の学問寺で教育を受け、1959年のダライ・ラマ亡命のしばらく後に難民としてインドへたどり着いた。1964年からダライ・ラマの哲学アシスタントを務め、かたわらで、チベット仏教に関心を抱いて欧米からダラムサラ（インドのダライ・ラマ居留地）にやってくる人々に向けて、仏教コースを開設し成功をおさめた。当時スイスでは、受け入れを決めたチベット難民のために、個人の篤志家が出資して本格的なチベット僧院の建設を行っていたが、ダラムサラでの西洋人向け仏教講座の成功を見込まれ、1974年にその僧院の2代目の院長としてインドより赴任し²³、以降スイスで仏教センターの開設に奔走した。タシ・ラブテンは1977年にスイスで開設したセンターについて2つ目のセンターにあたる。

都市の集合住宅の一室に設けられるセンターとは違い、大規模なセンターはまず土地を確保するという困難に直面する。キリスト教以外の宗教に接近することに違和感をもたない人々が増えたとはいえ、仏像を納める伽藍を持った聖なる建築物の建立に理解を示す地主はまだそれほど多くない。スイスのチベット僧院の建立にあたっては、州政府や教会教区の反対にあい、場所を二転三転させた経緯がある²⁴。レッツェホフの所有者は1975年にスイスへやってきた直後のゲシェ・ラブテンを紹介され、彼の仏教の話に共感し、教区を説得して土地と建物を提供した²⁵。最初はあまり歓迎されなかったようだが、最近では僧院一般開放日に配るパンフレットにフェルトキルヒ市長が挨拶文をのせるなど、行政レベルでの理解も高まり、現在、僧院開放日は小さな町の大きなイベントとなっている。

タシ・ラブテンは仏教講座部門と出版部門が活動の主体になっている。2006年5月

²³ Lindegger 1988 p.35

²⁴ Kuhn 1995 p.8-9

²⁵ Wiederin 1999

から7月の仏教講座部門は、ラムリム・チェモという仏典講読会、瞑想と仏教講話会、ダライ・ラマ誕生日にむけての祈祷会、タシ・ラブテンのあるフォアールベルク州教育監督庁との共催で、州内生徒への仏教講話会などが主な内容である。生徒への講話会は子供クラスと青年クラスにわかれ、欲望、憎悪、嫉妬、吝嗇、無知などのネガティブな精神の作用、思慮深さ、忍耐、同情などのポジティブな精神の作用についての仏教的解釈を、僧院の僧侶が解説する。僧侶はほとんどが西洋人で彼らもまたヨーロッパの仏教センターで仏教を学び、ヨーロッパで得度した人々である。上述の『シュピーゲル』誌による信仰の調査で、教会の役割を問う質問に、「社会規範の維持」という回答が多く寄せられている。タシ・ラブテンは仏教センターではあるが、青少年への道徳の指導など、キリスト教の教会に匹敵するような役割も果たしているといえよう。

3-3 仏教の組織化と宗教化

ヨーロッパで仏教が広まり、仏教徒であることが社会的に認知されるようになった要因には、僧侶の来訪など人と人との直接のつながりといういわばソフトの部分のほかに、信徒の組織化というハード面も重要な要素としてあげられる。日本やチベットで仏教徒であることと、ヨーロッパで仏教徒であることはその社会的なあり方が異なる。それは社会における宗教のあり方の違いをそのまま投影するものである。

ヨーロッパでは多くの国で地区に教区があり、その地域の人生まれながらにそこに属し、その教会で洗礼を受け、プロテスタントの場合は堅信礼を受け、またさまざまな地域の活動の場にもなっている。仏教徒になるということは、これらの地域的なつながりを困難なものにする一方、宗教を通じた個人の社会的な位置が曖昧になるということでもある。

仏教が宗教として存在するためには、教区教会のように国家によって公式に認められる

ことが必要で、そのためには禅やチベット仏教をはじめとするさまざまな仏教とその宗派をまとめ組織化する必要がある。こうした動きはヨーロッパ各国で見られ、ドイツでは1955年、オーストリアとスイスでは1976年、オランダ1979年、イタリア1985年、フランス1986年、ベルギー1997年、ポルトガル1997年に²⁶、それぞれ仏教連合が作られている。オーストリアでは1983年に、仏教が公立学校で正式に取り上げられたり、テレビやラジオへアクセスできる権利を有する宗教として、国家によって公式に認められた²⁷。前節で取り上げたタシ・ラプテンでの公立学校に対する仏教講話もこのような国家による承認に基づいている。このような国家的承認は、信者が仏教徒として社会的地位を得ることのほかに、宗教団体として税制面での優遇なども得られることから、仏教がますます確固たる基盤を作る助けとなっていった。こうして仏教はヨーロッパのいくつかの国で、単なる学問の対象や個人の風変わりな趣味ではなく、社会に認知される宗教となったのである。仏教の宗教化は、しかし、チベット人のように仏教が宗教でなかった地域の人々にとってもまた大きな影響を与えることになった²⁸。

社会の中での宗教のあり方の違いのもう一つの側面は形式である。チベット人にとってチベット仏教とはいわば日常生活のあらゆる面に遍在するものであるが、ヨーロッパにおける仏教は、切り分けられた宗教として受容されている。前出のタシ・ラプテンほどの規模はないが、町の中にはビルの一室や個人住宅をセンターにしている所も多く、このような場所がいわばキリスト教の教会に似た役割を負っている。イギリスに本部を持ち、世界40カ国に支部を持つチベット仏教のカダム派仏教協会は、スイス国内に17のセンターを持っている。そのひとつであるチューリヒのセンターでは毎週日曜日の午

²⁶ Baumann 2002 p.98

²⁷ *Ibid.* p.97

²⁸ 「2. 歴史的概観」の中でも取り上げたが、仏教という言葉はもともとアジアの「仏教圏」にはなく、ヨーロッパの東洋学による発明である。それゆえチベット語には仏教という言葉はなく、またもともと宗教という言葉もない。アサドはキリスト教世界での概念、特に宗教概念が、非ヨーロッパ世界を深いところで榨づけていることを指摘した。参照：アサド2004。チベット難民社会がチベット仏教という宗教概念を受容することで、どのような影響を受けたかについては、また稿をあらためて検証する予定である。

前9時から「日曜礼拝」が行われており、その内容はキリスト教のミサに驚くほど類似している。グレゴリオ聖歌を彷彿とさせる音階のドイツ語訳仏教「聖歌」、ドイツ語での仏典唱和、説教が1時間の「礼拝」の間に繰り返され、最後にはワインを一口ずつ戴く「聖体拝領」にも似た儀式が行われる。そこに集う人々が仏教に求めるものはさまざまであろうが、私には形式だけではなく内容までもが次第にキリスト教化しているように感じられた。十字架の代わりに仏像が、神父や牧師の代わりに僧侶がいるが、日本人の調査者の目から見ると、これが仏教とは到底思えない光景であった。このような形式のキリスト教化は仏教のヨーロッパ的な概念枠組みの宗教化をさらに促すものである。

4. おわりに チベット難民と仏教センターのつながり

ヨーロッパに次々と設立される仏教センターとチベット人コミュニティは、仏教の実践に関していえば、ほとんどつながりは見出せない。仏教センターを指導している僧侶はチベット人コミュニティとは離れた存在であり、コミュニティ内の日常の通過儀礼である結婚式や葬式を司るのは、インドに復興されたチベット寺院からチベット移民のためだけに派遣された僧侶たちである。チベット人から見れば、ヨーロッパで宗教と認められた仏教は、自分たちの生活感覚とはかけ離れたものがある。しかし、チベット人たちが変わっていく仏教に意義を唱えることもなければ、より真正な宗教を核にして集団の意識を高揚させることもしていない。インドに再建され、正統なチベット仏教を守っている学問寺²⁹の高位の僧たちが、むしろ進んで西洋に歩み寄ることを甘受しているように見受けられる。その理由のひとつは、ムスリムのように総人口も多く、しかも歴史

²⁹ セラ寺やデブン寺など、チベットで「大学」の役割をもっていた寺はほとんどインドに再建されている。現在でもチベットにはそれらの寺がそのまま残っており、多くの僧侶が仏教論理を学んでいるが、ダライ・ラマがインドに亡命していること、高位の僧侶の大半が難民として流出したこと、また中国の支配下にあつて、昔のような活動ができなくなっていることなどから、チベット人はインドに再建された寺を正統な流れとみなしている。

的にも常に関心を持たれていた人々と異なり、チベット人の場合、ホスト国において社会的な存在を保証されるのは、何よりも受け入れた側の関心の高さによるからである³⁰。

チベット難民が流出した 60 年代、アメリカの若者の間では既成の観念に対する懐疑や抵抗がカウンターカルチャーという文化現象として出現しはじめた。それとちょうど時を同じくして、インドにやってきた僧侶がアメリカへ渡っていった。チベット仏教は単に宗教として受け入れられたのではなく、この時代に合致した価値観である人権、平和、環境、健康と一体になってひとびとの心をとらえていった。このような関心がインドでの寺院の再建につながったということを知っている。現在のヨーロッパでもチベット仏教には必ずといっていいほど、政治、人権、環境、健康、平和というタームが重なってくる。たとえば、ドイツのハンブルクにあるチベット仏教センターが季刊で発行している *Tibet und Buddhismus* やドイツ仏教連合 (DBU) の同じく季刊雑誌 *Buddhismus Aktuell* のチベット仏教コーナーは、教義の解説と同じくらいのページを割いて、チベット問題や環境問題を取り上げている。また、チベット人のコミュニティの諸団体、スイス・チベット婦人協会 (Tibetische Frauen-Organisation in der Schweiz)、文化センター (Tibet Songten House)、ヨーロッパ・チベット青年協会 (Verein Tibeter Jugend in Europa) などはチベットの政治的問題を仏教とからめて宣伝している。2005 年にダライ・ラマがスイスを訪問した際のティーチングの会場付近では、さまざまな団体がパンフレットやビラを配っていたが、紙袋 1 杯たまったビラの大半はやはり同じような内容であった。チベット人のコミュニティと、ヨーロッパの仏教団体は直接のつながりはないが、しかし仏教を通して両者はゆるやかにつながっている。チベット仏教が宗教として、あるいは現代的な問題と関連して、本来のかたちを変えてヨーロッパに受容されていても、それが同時にチベット人の社会的存在を保証

³⁰ Kubota 2005

するものであれば、宗教は対立の要因ではなく、ヨーロッパと移民を親和的に媒介するものになる。しかし、親和的という状況は、かならずしも両者の対等な関係の上に成り立っているものではない。対立は問題点が可視化されやすく、取り上げられる機会も多い。しかし親和的なるものがいかなる問題を含んでいるかについてはあまり考察されないのではないか。短い間に時代の価値観の受け皿になっていったヨーロッパの仏教が、それを提供した人々にどのような影響を与えていったのか、また「受容の布教」が、布教した側の文化にいかなる影響を与えたかについては、さらに詳しく検証していく必要があるだろう。

参考文献

Batchelor, Stephen

1994 *The Awakening of the West. The Encounter of Buddhism and western Culture.*
Berkely,CA: Parallax Press

Baumann, Martin

1998 “Geschichte und Gegenwart des Buddhismus in der Schweiz“ *Die Zeitschrift fuer Missionswissenschaft und Religionswissenschaft 82 Heft 4* Internationales Institut fuer missionswissenschaftliche Forschungen e.V. St.Ottilien: EOS Verlag

2000 “Buddhism in Switzerland“ *Journal of Global Buddhism 1*: 154-159
<http://jgb.la.psu.edu>

2001 “Global Buddhism: Developmental Periods, Regional Histories and a New Analytical Perspective” *Journal of Global Buddhism 2*: 1-43
<http://jgb.la.psu.edu>

2002 “Buddhism in Europe Past,present,Prospects“ *Westward Dharma* Berkeley and Los Angeles: University California Press

2005 “Shangri-La, Diaspora und Globalisierung Tibetischer Buddhismus weltweit” in Museum für Völkerkunde Hamburg(Hg). *Die Welt des Tibetischen Buddhismus*, Mitteilungen aus dem Museum für Völkerkunde Hamburg, Band 36 s.357-388.

Kantowsky, Detlef

1994 "Buddhistischer Modernismus im Westen" *Gesellschaft, Demokratie und Lebenschancen. Festschrift fuer Ralf Dahrendorf* Stuttgart: DAV

Korom, J Frank

1997 "Tibet und die New Age-Bewegung" *Mythos Tibet Wahrnehmungen, Projektionen, Phantasien* Bonn: Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland GmbH.

Kubota Shigeo

2005 "Somewhere between Success and Neglect: the Social Existence of Tibet in Sweitzerland" *Discussion Paper Series* Center for New European Research Hitotsubashi University

Kuhn, Jacque

1995 *Warum ein tibetisches Kloster in Rikon?* Tibet-Institut Rikon Schriften Nr.10 Zürich: Monastic Tibetan Institut.

Lavine, Amy

1998 "Tibetan Buddhism in America: The Development of American Vajrayana" *The faces of Buddhism in America* Berkeley and Los Angels: University California Press

Lindegger Peter

1988 *20 Jahre Klösterliches Tibet-Institut Rikon/Zürich* Zürich: Monastic Tibetan Institut.

Mürmel, Heinz

2001 "Buddhismus und Theosophie in Leipzig vor dem ersten Weltkrieg" *Buddhismus und Hindus im deutschsprachigen Raum: Akten des zweiten Grazer Religionswissenschaftlichen Symposiums*. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Obadia, Lionel

2000 "Une tradition au delà de la modernité : l'institutionnalisation du bouddhisme tibétain en France" *Recherches Sociologiques* 2000/3 67-88

Prothero, Stephan

1997 *The White Buddhist –The Asian Odyssey of Henry Steel Olcott*. India: Sri Satguru Publications

Schneider-Buehler, Renate

2002 *Buddhismus im Westen am Beispiel der Schweiz* (unpublished)

Schweidlenka, Roman

2001 “Buddhismusrezeption der Gegenkultur und Alternativbewegung im Deutschen Sprachraum seit 1968“ *Buddhismus und Hindus im deutschsprachigen Raum: Akten des zweiten Grazer Religionswissenschaftlichen Symposiums*. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Ugen, Mirjam Lüpold

1997 *Eine Untersuchung zur Bedeutung der Religion für die Tibeter im Schweizer Exil*. (unpublished)

Wiederin, Osker

1999 *Seinerzeit in Frastanz* Hecht-Verlag

アサド、タラル

2004 『宗教の系譜：キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』中村桂志・訳 東京：岩波書店

ダニエル、E・ヴァレンタイン

2002 「『信仰』の確立と集合的暴力」『20世紀の夢と現実 –戦争・文明・福祉–』加藤哲郎、渡辺雅男・編 東京：彩流社

ドロワ、ロジェ＝ポール

2002 『虚無の信仰－西欧はなぜ仏教を怖れたか－』 島田裕巳、田桐正彦・訳

雑誌

Der Spiegel Nr.33/15.8.05